

數は、一〇、三籽每秒乃至一一、二五籽每秒であつて、陸地の表層を通る震波に關するものよりも決して小さくはない。(氣象集誌第二輯第六卷第十號)此の事實と前述の如く縦波の速度の大きい事を認めたと上は、横波も亦海底の方が速度が大きい事か推斷出来る。

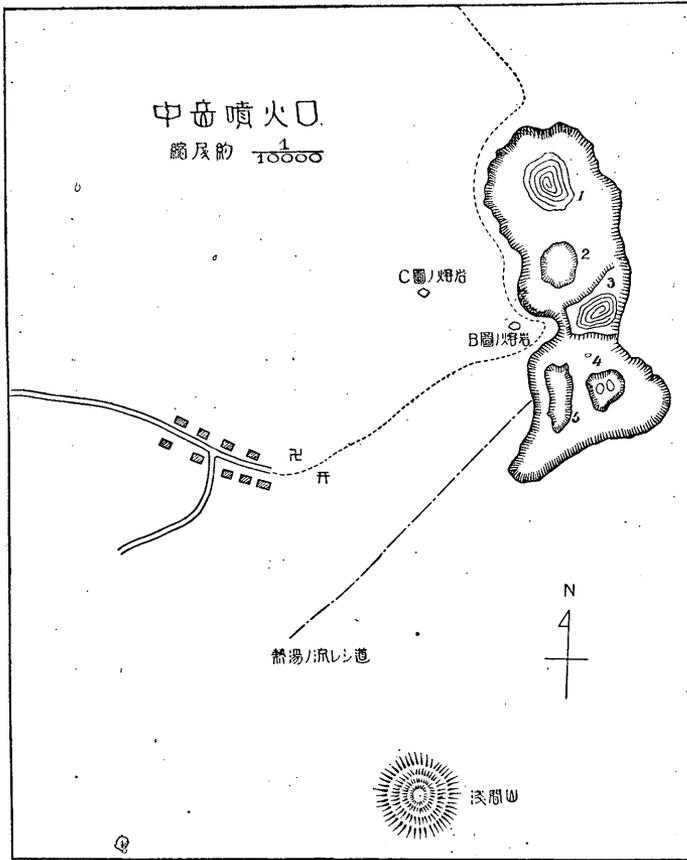
## 報 告

### 阿蘇火山に關する近況報告

熊 本 測 候 所

阿蘇火山は本年に入り頓に勢力を失ひたるも一月十二日には小爆發を起し噴烟上騰し當時の鳴動は高森方面迄聞えたり其後は一長一消僅に間歇的に白烟(大部分水蒸氣なるものの如し)を擧ぐる程度にて経過せり、而して五月廿五日當所高瀬技手登山の際には、南の池(第四火口)は全く休止状態にありて、却て中の池(第二火口)に活氣を呈したる程迄に到れり。然るに九月六日午後五時四十分頃俄然南の池は再び中程度の爆發をなし、一時は黒煙天に沖し、附近の人々戶外に出て、望見せし程なりしも、又忽ち衰へたり、同月廿三日當所佐々木技生登山の時には、南の池は猶餘勢を持ち白煙を擧げつゝありたりと云

(一) 噫火の現状



裂を生じ、中央部二十坪位裂孔の所々一〇〇ヶ所位の孔より熾んに蒸氣を噴出し、ゴト／＼音を立てつ

ふ、然るに十月十一日頃より南の池は再び活動を開始し、本年に入りて初めての壯觀を現はせり、其後連日黒煙強く噴出し、霾は高森方面迄降散したるも、目下格別の被害を認めず。

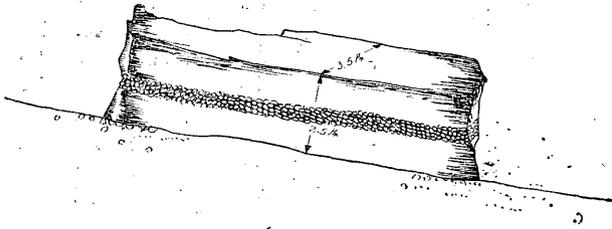
昭和二年十一月二日及三日の兩日阿蘇山を踏査せし報告左の如し。

第一の池は濁水を湛へ僅に弱き湯氣をその縁邊より噴出する程度にて至つて靜穩なり。

第二の池は表面泥土にして、龜

最大ナル熔岩

位置 火口直列約100メートル  
火口直列北西ニ當ル  
中央部ニ屬シタル黑色小石ノ熔接シタル所

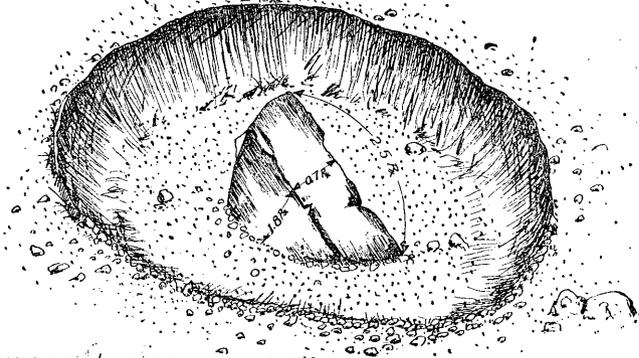


長さ了及 骨積61才  
重量約1190貫 比重2.6

B  
圖

第二ノ熔岩及凹陷

位置 火口直列約360メートル  
火口直列北西ニ當ル  
凹陷上端距離約3メートル  
深サ 約1メートル



坡中ニ余程打入り列ガ如シ

C  
圖

つあり。孔の縁邊には硫黄の結晶物凝結せり。蒸氣の噴出は實に熾にして四〇米位の高さ迄熱湯を混じて噴き出しつゝあり。

第三の池は少しく水を湛へて全然休止状態を續け居れり。

第四の池は、目下猛烈なる噴烟中にて本年九月六日の爆發後は火口二ヶ所となりし模様にて、新しきものは、舊火口の西側に生じ、舊火口は休止せるらしく見受けらるも、目下熾んに噴烟中にて、その狀判然たらず、噴煙は第二池蒸氣噴出の如く、壓力はなく朦々と噴き出す様汽車の烟突より烟をはく状態に似たり、噴煙は褐色を呈しよなを相當混じ居れり。

硫黄の臭氣鼻を刺戟し、噴烟に直面する時は呼吸苦しく、煙目に入る時はびり／＼痛みを感ず。

第五の池は少々濁水を湛へ、孔壁の所々より小部分活氣ある蒸氣を噴出せり。

## (二) 最近噴火の變遷

山上茶店の市原榮馬渡邊農藏兩氏より聽取したる所を綜合するに、第四の池は本年九月六日午後五時四〇分一大活動を始む。

從來蒸氣を噴出したるのみなりしが、當日より黒烟噴出し十月五日よりはよなを混じたる黒烟噴出し十月十四日よりは更に噴烟甚しく、十月三十日よりは噴烟褐色を帶ぶ。

第二の池は約一ヶ月位前迄は水を湛へたるも水次第に減少し、現今は全く乾き、泥土の池面龜裂を生

熾に蒸氣を噴く外、時々部分的に泥土を打ち上げつゝあり、第二池噴出の變遷は從來他の池爆發の徑路に酷似したる所にして或は近く爆發するものの様に思はる。

九月六日以來今日迄熔岩噴出程度の小爆發をなすこと七回に及べり斯かる頻繁なる活動は明治三十八年以來のことにして、山上に生業を營む者も少しく恐怖を感じる位なり。

(三) 九月六日爆發の模様(市原、渡邊兩人の談による)

當日午後五時四〇分頃火口の南側に當る淺間山がゴロ／＼又はごろ／＼と鳴動したるにより、この山が爆發するかと思ふ内、更にと音して、戸障子振動せり、直に火口に急ぎ向ひたるに途中道の南側には一面泥土を混じたる、熱湯が川をなして流れ居りたるには驚けり。

この流は後にて見たるに、高さ六尺位の所にその痕跡を残して、烏帽子岳の南側に流れたり、是が若し、茶店の方に流れしならば、同方面は餘程の被害ありし事と戦慄を感じたる次第なり。

この爆發によりて、經一尺位の熔岩は數百箇或は千箇位も飛び出せり。

(四) 噴出せし熔岩

既に五十日以上を經過せしが故に、九月六日爆發當時の熔岩噴出狀況を詳に知り難けれ共、其所々に散在せる模様よりして、熔岩は數百を以て數ふる程なり。之等は經一尺又は二尺程度のものにしてその位置は火口丘より北西に當る方面にのみあり、火口丘よりの距離一〇〇米より三〇〇米位の所に多く落

下せるが如し、(この噴出方角は從來より變らざるが如し) その内最大なるものは別紙B圖のものにして概略六十一才二一九〇貫に及べり。(熔岩破片の比重二六あり) C圖に於けるが如き強痕とも云ふべき、地面の摺鉢狀凹陷は爆發の當時は數多かりし由なれ共、現在は其の形くずれて極めて大なるものゝ外は認め難し。

(五) 附近温泉等の狀況

山腹の湯の谷温泉場等にては、その泉狀の近時異狀を認めざる由なり。

(六) 終に、九月十月中に於ける熊本よりの遠望觀測による噴烟の狀況を左に記す。

九月二十三日	噴烟あり弱(白色)	十五日	〃
十月一日	同上(白色)十七時より噴烟強し	十六日	噴烟やゝ強し
三日	噴烟あり弱	十八日	噴烟あり弱し微量
六日	〃	十九日	噴烟強し
八日	〃	二十日	噴烟強し
九日	〃	二十一日	噴烟強し
十日	噴烟ありやゝ強(白色)	二十二日	〃 飛來す
十月十一日	噴烟強し	三十日	白烟弱し
十二日	〃	三十一日	白烟弱し
十三日	〃	十一月一日	噴烟強し
十四日	〃	四日	噴烟弱し

(日淺技手踏査報告)